

聖書：I サムエル 22：1～23

説教題：恐れることはない

日時：2017年4月9日（夕拝）

前の章でダビデは大変な苦境を通らされました。サウルから命を狙われて国内に安全な場所はなくなり、敵国ペリシテの地に逃げ延びて行かざるを得ませんでした。そこでダビデはガテの王に捕らえられ、気が違ったかのように振る舞い、門の扉に傷をつけたり、ひげによだれを流したりといった狂態を演じて、何とかから解放されました。しかし彼はその状況で詩篇を二つも作ったことを前回見ました。彼はその苦しい状況で信仰の格闘をしていたのです。他では学び得ない貴重な学びの時でもあったのです。そうして無事、救い出されたダビデは、今日の22章でアドラムのほら穴に避難します。その彼に少しずつ良い導きを与えられて行く様子を私たちはここに見ます。

まず彼の兄弟や彼の父の家の者がみな彼のところに下って来ます。これはダビデを助けるためではありません。ダビデの居場所を突き止めようとするサウルは当然ダビデの家族にも目をつけていたでしょう。つまり彼らも命が危なかったのです。彼らはダビデがアドラムのほら穴にいるという情報を得るや否や、みなダビデのところにやって来ます。また2節では「困窮している者、負債のある者、不満のある者たちもみな、彼のところに集まって来た」とあります。ダビデは彼らを受け入れ、一緒に生活します。その結果、ダビデと一緒にいる人たちは一気に400人となります。後のIIサムエル記23章を見ると、この中からやがて大きく用いられた勇士たちが出たことが分かります。ダビデはこのような状況で年老いた両親を安全に避難させるためでしょう、モアブの王のところに行ってこう願い出ます。3節：「神が私にどんなことをされるかわかるまで、どうか、私の父と母とを出て来させて、あなたがたといっしょにおらせてください。」ここにダビデが今や神に信頼し、その導きに委ねて歩んでいたことが示されています。そしてモアブの王からはOKの返事が出ます。ここにも協力者が与えられます。さらには預言者ガドがダビデと共に歩むようになります。サウルからすでに預言者の祝福は取り去られていましたが、ダビデにはこうして主の預言者が遣わされたのです。その預言者は5節で「この要害にとどまっていなくて、さあ、ユダの地に帰りなさい。」と言います。ダビデにとってこれはチャレンジだったでしょう。ユダに帰るとはサウルが支配する世界に再び入って行くことです。あえて危険の中に身を置くことです。しかしダビデ

は人間の知恵や工夫によってではなく、神に信頼して自分の居るべき場所に戻るよう
との導きを受けます。ダビデはこれに従います。こうして厳しい 21 章を通らせられた
彼でしたが、良い導きが一つ、また一つと与えられて行ったのです。

一方のサウルの様子が 6 節から記されます。彼のところにも、ダビデおよび彼ととも
にいる者たちが見つかったというニュースが入ります。サウルは槍を手にして座ってい
ました。いつまたこれを誰に投げ付けるか分からないピリピリとした雰囲気を感じられ
ます。彼はそばに立っている家来たちに言います。7～8 節：「聞け。ベニヤミン人。エ
ッサイの子が、おまえたち全部に畑やぶどう畑をくれ、おまえたち全部を千人隊長、
百人隊長にするであろうか。それなのに、おまえたちはみな、私に謀反を企てている。
きょうのように、息子がエッサイの子と契約を結んだことも私の耳に入れず、息子が私
のあのしもべを私に、はむかわせるようにしたことも、私の耳に入れず、だれも私のこ
とを思って心を痛めない。」 サウルはここで、自分が家来たちにどんなに良くしてや
っているか、と述べます。これはダビデなら決してしないことだ。それほど私はおまえ
たちの益をはかってやっている。なのにおまえたちはありがたいと思っていない。それ
どころか、おまえたちは私に謀反を企てていると言います。これは本当でしょうか。こ
れまでのところを読む限り、サウルの家来たちが謀反を企てていたというようなことは
どこにも示唆されていません。彼らは王に仕えるしもべとして忠実に働いています。サ
ウルが精神錯乱状態に陥って残念な姿をさらけ出しても、彼のもとを去らず、こうして
側に立ち、共にいました。しかしこの時のサウルは周りにいる人すべてを疑いの目で見
るようになっていたのでしょうか。このしもべたちもみな私を裏切るのではないか。私の
知らないところで私を陥れるための密かな計画を立て、水面下で動いているのではない
かと。そして「だれも私のことを思って心を痛めない。」と嘆いています。

そんな時にエドム人ドエグが「私は、エッサイの子が、ノブのアヒトブの子アヒメレ
クのところに来たのを見ました。アヒメレクは彼のために主に伺って、彼に食料を与え、
ペリシテ人ゴリヤテの剣も与えました。」と告げます。前の 21 章 7 節に、このドエグの
目撃のことが記されていました。サウルはこれを聞いて怒りを爆発させます。やはり私
に組しない者たちがいたか！と。そして彼とその家の者全部を直ちに呼び出せ！と命じ
ます。そして続きを読むと分かりますように、彼とその家の者全部に死刑を宣告します。
はじめ家来たちが手を下すように命じられますが、罪のない主に油注がれた祭司たちを

殺すなど、神の前にとっても恐ろしくてできません。しかしそこにドエグがいました。彼はエドム人であって祭司に打ちかかることに何の良心の痛みも感じません。むしろこの時こそ昇進のチャンスとばかり、彼はエポデを来ていた祭司85人に次々と切りかかり、彼らを虐殺します。さらには祭司の町ノブに出て行って、男も女も、子供も乳飲み子までも剣の刃で打ちました。牛もろばも羊も、みな絶滅させたのです。こうしてサウルは前代未聞の殺戮をエドム人と組んで断行しました。この記事が示しているメッセージの一つは、サウルはこうして自分がイスラエルの王にふさわしくない者であることをいよいよ決定的に示したということでしょう。

このサウルの行動について考えてみたいと思います。なぜ彼はここまで行ってしまったのでしょうか。今日の章で強調されていることは、サウルが精神的に非常に孤立していることです。ともにいる家来たちのこともみな疑い、「だれも私のことを思って心を痛めない」と自己憐憫に陥っている。そしてちょっとした情報を独断で解釈し、関係者をみな滅ぼしてしまわないと気が治まらない。なぜサウルはここまでの状態に陥ったのでしょうか。それはこれまで見て来ましたように、彼が神を退け、神との交わりから来る本当の平安を失ったからでしょう。悔い改めのチャンスが何度も与えられたのに、彼は繰り返しそれを退け、神に立ち返ることをしなかった。その結果としてサウルはここまでの病的な孤独感、孤立感にさいなまされていたのです。

私たちはここから二つのことを学びます。一つは私たちもこの「孤独」という問題を正しく解決しないと、同じような事件を起こしかねないということです。8節のサウルの言葉を聞いて私たちは彼をかわいそうにも思います。誰でも皆、言葉に出さなくても、これと同じような感情を抱いたことがあるのではないのでしょうか。そして本当にだれも私のことを思って心を痛めないと思う時、人は自暴自棄になって、サウルのような行動を起こしかねません。しかし反対にもし私のことを思って心痛めてくれる人がいると知る時、私たちは支えられ、立ち上がって行くことが可能になります。そして確かに私たちにはそういう方が与えられています。それは何と言っても私たちの神でしょう。神は私たちを思って「心」痛めるところか、私たちのために測り知れない犠牲を払って下さいました。このお方を知る時、私たちは自己憐憫から解放され、この方を知る喜びと望みにあふれる生活へ立ち上がって行くことができます。しかしこの方を退け、この方から離れると、私たちはこの確実な平安の基盤を失います。そして自分より成功している

人を見て嫉み、自分を願うように評価してくれない人のことを憎み、ついには怒りを爆発させて、とんでもない事件を起こしてしまう。ですからこのような悲惨に落ち込まないために何よりも神との関係を大事にして、そこに与えられる平安と喜び、また感謝と満足に満ちた歩みへ進みたいのです。

そしてサウルの姿から考えさせられるもう一つのことは、彼がいよいよ末期的状況に至っているということです。サウルはこれまでも悪を行なって来ましたが、主が立てられた祭司たちを皆殺しにし、その町を全滅させたことは、これまでして来たレベルを明らかに超えています。彼はこうしてまた新しい一線を超えてしまった。悔い改めのチャンスを逃げ続けたサウルは、こうしてさらなる悪へ突っ走っている。ローマ書1章に「それゆえ、神は彼らをその心の欲望のままに汚れに引き渡された」とある通りです。ですから私たちは早くに正しい道に立ち返らなければなりません。今という時に、そのことをしなければ、自分は益々頑なになる危険が高いのです。

このような孤独に悩むサウルと対照的なのがダビデの姿でしょう。彼のところに一人、虐殺を逃れた祭司エブヤタルがやって来てノブの町で起こったことを告げます。ダビデはその報告を聞いて、やっぱりあのドエグがそうするだろうと私は思っていたと言います。そして「私が、あなたの父の家の者全部の死を引き起こしたのだ。」と言います。これはどういう意味でしょうか。もちろん本当の意味で責められるべきはサウルです。しかし前の章で見ましたように、ダビデはひもじかった時、祭司アヒメレクのもとを訪れて偽りを述べてパンをもらいました。人間的な知恵と方法でその状況を乗り越えようと図り、結果的にこうしてアヒメレクや祭司たちを巻き込んでしまいました。ダビデは自分の愚かさを思ったことでしょう。しかし彼は続けてエブヤタルに「私といっしょにいなさい。恐れることはない。」と言っています。「私といっしょにいれば、あなたは安全だ」と。なぜこう言えたのでしょうか。それはダビデ今や、神によって自らが守られることを確信していたからに他なりません。これは非常に大胆な言葉です。ダビデには十分な武器があるわけではありません。今、400人の仲間がいるとは言え、サウルの兵士たちの数とは比べ物になりません。彼は今、追われている弱い立場にあります。肉の目で見るなら、いくらでも不安や恐れの中に埋没してもおかしくない状況がありました。しかしダビデは神を見上げて、この状況でも「恐れることは何もない」と言えたのです。行く先はまだ見えず、何か良い計画が立っているわけではありませんが、神に信頼する

がゆえに「大丈夫だ」と確信する世界に生きることができた。これはまず神を見上げ、神との交わりを大事にし、神に信頼する信仰者が持つことのできる不思議な平安であり、また力強い確信でしょう。そしてこのようなダビデのところに共に歩む者たちが次第に増やされて行ったのです。これは恐れと不安の中で、「だれも私のことを思って心痛めない」と孤独の叫びを發し、半狂乱になっているサウルと何と対照的でしょうか。

果たして私たちの生活はどうでしょうか。もし神から目を離し、神の御言葉から離れる生活へ進むなら、私たちもいずれ不安と孤独の毎日を歩まなければならなくなります。そして神からの平安と満たしを受けない分、人からの評価、賞賛、支えを得ようとしますが、人は皆、私が願う信号を返してくれるわけではありません。むしろ私の願わない人のことを人々が評価し、賞賛するのを私たちは見るでしょう。その時、私たちはだんだんサウルに似た者になって行く。私はこのようにしてあげているのに、だれも私のことを思って心痛めない。周りの人は皆恩知らずで、私は皆からひどく扱われている不幸な人間だ！と叫ぶ。そして自暴自棄の行動に至り、取り返しのつかない結果に行き着く。ですから私たちは神を見上げ、ダビデが歩んだ祝福に歩ませて頂きたいのです。ダビデは決して完全な人ではありませんでしたが、主に立ち返る彼を主は赦し、受け入れ、ご自身がともにいるという平安を彼の心に与えて、その歩みを導いてくださいました。その方を私たちも見上げて、「だれも私のことを思って心痛めない」と語る嘆きの生活ではなく、反対に「主は私とともにおられ、その聖なる御手をもって上から守り導いて下さっている」と知る喜びと確信の生活に進みたい。それゆえ、様々な困難に囲まれていても、また先が見えなくても、「恐れることはない」と告白して主に信頼して歩む信仰者の力と幸いに生かされて行きたいと思えます。